



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行/カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



堅信の思い出

主任司祭 小西 広志 神父

5月22日の堅信式で堅信の秘跡を受けられた皆さん、おめでとうございます。

50年前のわたしの堅信式の時を思い出していました。わたしは小学四年生でした。聖母被昇天の暑い日だったことだけは覚えています。しかし、あとは何も覚えていません。むしろ、堅信式に先だつ数ヶ月まえから毎週土曜日の午後に司祭館に行って、準備の勉強をしたのを覚えています。勉強といっても、イエスさまのことも神さまのことも学びませんでした。むしろ教会の歴史の中に生まれた小さな聖人たちの話を学びました。昔の神父さまたちはお話し上手な方が多かったので、子どもたちはお話の世界に引き込まれていきました。わたしも同じで、いくつかの小さな聖人たちの物語を今でも覚えています。

ある少年はご聖体を運ぶ途中で、いじめられて、石を投げつけられたけど、ご聖体を胸に抱いたまま死んでいったというのです。この聖人の名前は未だに分かりません。でも、学校のクラスで信者であることを隠すように生きていたわたしには衝撃的な話でした。それから、福者イメルダの話も覚えています。9歳だか12歳の女の子がご聖体を熱望していたが、なかなか許可がおりなかった。当時の初聖体はもう少し歳を経たからのものだったからです。しかし、あるとき特別に許可をいただいて、イメルダは初めてご聖体を拝領しました。そして、すぐに死んでいったというお話です。「ご聖体をいただいたら、他は何もいらないとイメルダは考えたんだよ」と語ってくれた神父さまを覚えています。そして、もっとも印象的に覚えているのは、これも名前を忘れましたが、ある少年の話です。ある日、その教会の神父さまが子どもたちにあと三日で世の終わりがくるとしたらあなた方は何をすることと問いかけたそうです。ある子は怖いからお父さんとお母さんのそばにいと答え、ある子はおいしいものをお腹いっぱい食べると答えました。しかし、その少年は、聖堂に入ってご聖体の前で祈って過ごすことと答えたのです。そんなやりとりのあった日の夕方、神父さまが聖堂に入ってみると、少年はご聖体が安置されている聖櫃の前にひざまずいたまま死んでいました。この物語はともわたしの心を揺さぶりました。

堅信の秘跡の準備の勉強会で教えてもらった同じ年頃の小さな聖人たちの物語から、わたしは子どもなりに気がついたことがありました。それは、信者として生きていくことと、自分が死んでいくこととはつながっているという事実です。信者が生きていく上にはいつも死が横たわっている。自分が死ぬことと自分がキリスト信者として生きていくことはコインの裏表の関係なのだという漠然とした理解でした。いわば、キリスト教的終末の生き方を子どもなりに知ったのです。

堅信式を終えて、秋口になって同級生のお父さんが船から海に落ちて死んだという出来事がありました。漁師町ですから、海の事故は必ずありました。大人たちから聞かされていた事故が、今、目の前にいる同級生の父親にも廻ってきたのです。なぜかわたしと何人かの子どもたちはお葬式のためにお寺に行きました。そこにいた人々は皆、泣いていました。でも、わたしにはなぜ泣いているのかが分かりませんでした。もちろん、突然、父親を亡くした子どもの哀しみは伝わってきたけど、なぜ涙を流しているかが分かりませんでした。その子の父親はけっこう家族思いで、子どもたちのためにいろいろと尽くしていたのを知っていたわたしは、ああ、このお父さんは自分の務めを終えて天国にいったのだと考えました。

その年の秋も深くなって福島のおじさんが亡くなりました。大きな自宅で執り行われている葬式の様子を見て、どうして皆は泣くんだろうと思いました。このおじさんは自分の務めを終えて神さまのもとに帰っていったのだ。だから泣くのはおかしいとわたしは感じていました。厳しいけど、優しく見守ってくれるおじさんでした。一番こころに残っているのは、ある大雪の朝、庭木に積もった雪を一本ずつついでいねいに振り落とす姿です。誰かのために何かのために自分を奮い立たせて働くおじさんは、今、自分の使命を終えて天国へと帰っていったのです。そう思うと涙は出てきませんでした。

人は、神さまから与えられた使命を生きる。そして人は、その使命を終えて旅立つ。この考えは堅信の勉強会で得た子どもなりの人生観だったのです。

あれから半世紀を経て、今回、13名の方々と共に堅信の秘跡の準備をしました。かつてのようなお話し上手な神父ではわたしはありませんから、聖人たちの話はしませんでした。でも、神さまの話も、イエスさまの話もしませんでした。勉強会の最初、こんな感じで話しました。「皆が生まれたとき、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、誰もが喜んだんだよ」。「そして、皆が洗礼の秘跡を受けたときはもっと周りの人々は喜んでくれたんだ」。「あなたたちはもともと、生まれたときから、周りの人に喜びをあたえる存在なんだよ」。「そして、これからも、多くの人々に喜びを与えるんだ。それが神さまがみんなに与えてくれた使命なんだよ」。「でも、自分のこころの中に喜びが無ければ、人に喜びをあたえることはできない」。「喜びは自分で作り上げるものではなく、聖霊を通じていただく神さまからのプレゼントなんだ」。「だから、堅信の秘跡で、聖霊のめぐみをたくさんいただいて、喜びを生きる人になるんだよ」。

わたしの想いが伝わったかどうかはわかりません。しかし、ご聖体を胸に抱き込み石を投げつけられた少年も、ご聖体を切望して死をもいとわないと願った福者イメルダも、終わりの時をご聖体のイエスさまと共にすごしたいと考えた少年も、喜びのうちに生きたのです。海に投げ落とされたお父さんも、庭木を大切にしておじいちゃんも、誰かのために生きることに喜びを感じたのです。

今年、堅信の秘跡を受けた方々が父なる神さまから聖霊のめぐみをたくさん受けて、御子イエスさまのように、喜びと誰かのためにという使命を生きることができるようになりますように。アーメン。